

# 青年期における性役割形成と達成動機との 関連について

## A Study of the Relationship Between Gender-Role Formation and the Achievement Motive

芳 田 茂 樹  
Shigeki YOSHIDA

### 1. 性役割尺度について

性役割の概念と測定についてはすでに報告した(芳田, 1989)が、その中では、Bem, S.L. (1974)が開発したBem Sex-Role Inventory (BSRI)を使用して、青年期の性役割形成について調査した。その結果、性役割同一性の形成において、従来までの研究で指摘されてきた未分化(Undifferentiated)から女性性(Feminine)－男性性(Masculine)を経て両性性(Androgynous)に至るという発達過程に関する仮説は、必ずしも男女に等しく当てはめることは出来ず、むしろ未分化な性役割同一性から同性性的性役割同一性がまず習得され、その上に異性性的性役割同一性が包含され、最後に両性性的性役割同一性として統合されるであろうという結論を得た。しかし、そこで使用したBSRIは、Bem, S.L.がアメリカの文化の中で作成したものであるため、そのまま日本で使用するには不適切な項目があり、日本で新たに性役割尺度を作成することが、必要とされていた。

そこで三川ら(1989)は、性役割尺度作成にあたり、次のような事柄を考慮しながら検討を加えた。

まず第1に項目源としてBem, S.L.のBSRI、Spence, J.T.のPAQ及びいくつかの日本で作成された尺度から重複するものを省いた性役割予備尺度97項目を被検者に呈示したことである。BSRIやPAQは、上記したようにアメリカの文化の中で作成したものであるから、そのまま日本で使用することは不可能なのは当然であるが、全然使用不可能ともいえず適切なものをピックアップする必要がある。さらに今まですでに日本で作成された尺度はステレオティピカルな男性性、女性性を肯定し、それに基づいて項目が選ばれているものが多く、ステレオティピカルな男性性、女性性が現在の社会の中にそのまま通用するものか否かの検討が必要となる。

そこで我々は男女大学生を対象に性役割予備尺度97項目について、どの程度自分にあてはまるかを、「非常によくあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」までの5段階で自己評定させることにより反応させた。

従来の反応収集には、理想的と思われる男らしさ、女らしさについての評定、その文化で

## 青年期における性役割形成と達成動機との関連について

典型的と思われる男らしさ、女らしさの評定などもある。しかし、我々の研究の主目的は、青年期における人格形成と精神的健康との関連について検討することであり、そのための一つの用具として性役割尺度が作成されたのである。それ故、青年が自己の中に意識的に把握している特性こそが重要であり、自己評定による特性は、その文化の典型的な特性や望ましいとみなされる理想像と重なり合わない部分の方が大きいものと思われる。そこから自己評定による反応の収集という点が、第2の考慮した点である。また、大学生を対象にしたのは、青年期後期にあたり、従来の研究結果から性役割観はすでに形成されており、性役割同一性もかなりの比率で確率されていることが明らかであることによった。第3の考慮点は、男性性予備尺度及び女性性予備尺度の項目選定である。先述の97項目に対する反応について、男女別に平均値と標準偏差を求め、平均の差の検定（t検定）によって性差を検討した。項目群は、①「男子の平均が女子の平均より高い項目群」、②「女子の平均が男子の平均より高い項目群」、③「男女に差のない項目群」に分けられたが、性差の大きい順に各30項目を選び、①を「性役割男性性予備尺度」、②の30項目を「性役割女性性予備尺度」とした。ここで除外した③の項目群には、男女共に自分に「あてはまる」と反応した項目と、逆に「あてはまらない」と反応した項目とが含まれており、特性について男女共に「あてはまる」と自己評定した項目は、性役割特性というよりはむしろパーソナリティの他の特性であると考えられ、BSRIにおける「社会的望ましさ」の項目、あるいは、PAQの「M-F尺度」に対応するものと考えられるので性役割尺度からは除外した。

さらに男女90名ずつ合計180名のデータを用いて、「性役割男性性予備尺度」及び「性役割女性性尺度」の因子分析を行った。その結果、両尺度ともに2因子抽出され、男性の性役割は、『男性統合性』および『男性典型性』と命名される2因子で構成され、女性の性役割は、『女性統合性』および『女性典型性』と命名される2因子で構成されていることが示さ

表1 性役割尺度の質問事項

男性統合性	男性典型性	女性統合性	女性典型性
1. 良心的である	2. 自分に自身がある	3. 陽気である	4. 嫉妬深い
5. 誠意がある	6. 自分の信念を曲げない	7. 力強い	8. 同情的である
9. 思いやりがある	10. 個性が強い	11. 頼りになる	12. 傷ついた心をなぐさめなくなる
13. 正直である	14. 容易に決断を下せる	15. 友好的である	16. 計画性がない
17. 話し方が穏やかである	18. 支配的である	19. 積極的である	20. 感情的である
21. やさしい	22. 男性的である	23. 活動的である	24. 重大な危機に動揺する
25. 温厚である	26. 人の影響を受けにくい	27. 感謝の気持ちを持つ	28. 人に認めてもらいたい
29. 親切である	30. 少しぐらいのことでは動じない	31. 人に献身的である	32. 傷つきやすい
33. きれい好きである	34. 仕事の手腕がある	35. 人の気持ちに気づく	36. すぐに泣く
37. 知的である	38. 臆病でない	39. 社交的である	40. 安心を求める

れた。

これらの結果に基づいて、「性役割男性性予備尺度」及び「性役割女性性予備尺度」とともに、各因子ごとに因子負荷量の高い方から順に10項目を採択し、表1に示した性役割尺度を作成した。この尺度の特徴は、従来の性役割尺度が男性性と女性性の2下位尺度から構成されていたのに対して、男性性2因子、女性性2因子の4下位尺度から構成されていることである。

## 2. 達成動機について

Murray, H.A. (1938) は、達成について「困難なことを成し遂げること。自然物・人間・思想に精通し、それら进行处理し、組織化すること。これをできるだけ速やかに、できるだけ独力でやること。障害を克服し、高い標準に達すること。自己を超克すること。他人と競争し他人をしのぐこと。才能をうまく使って自尊心を高めること。」であるとした。

宮本 (1979) は、達成動機をその文化において優れた目標であるとされる事柄に対し、卓越した水準でそれを成し遂げようとする意欲であると定義づけた。

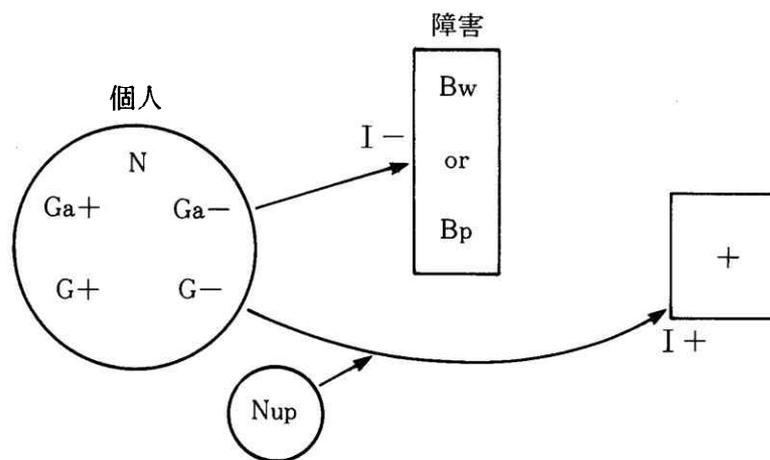


図1 目標達成への一連の行動様式  
(McClelland, et al., 1953)

McClelland, D.C. ら (1953) は、Murray, H.A. の“達成”の定義を吟味し、達成動機の基準を3つ挙げた。すなわち、

- (1) 卓越基準を設定し、これに挑むこと
- (2) 独自のやり方で達成しようとする
- (3) 長期間かかる達成を期していること

の3点である。これらの基準に合致するような達成動機をもって目標をたてた時に、目標志向行動としてどのような要因が関わるかを、一連の行動様式として説明したのが図1である。これによると、個人が欲求または動機 (N ; need for achievement) を経験する時には一連

## 青年期における性役割形成と達成動機との関連について

の行動様式が見られ、個人の目標に対して成功的達成を予想したり ( $G a^+$ ; positive anticipatory goal state)、フラストレーションや失敗を予想したり ( $G a^-$ ; negative anticipatory goal state) する。また、目標達成のために手段的な活動 ( $I$ ; instrumental activity) を行うが、その手段的な活動が目標達成に成功するとき ( $I+$ ) と、成功しないとき ( $I-$ ) とがある。時には、目標志向行動は阻止されることがあり、目標達成途上の障害または阻止 ( $B$ ; block or obstacle) は、広く外的環境 ( $B w$ ; obstacle in the world at large) による場合と、自分自身の個人的欠陥 ( $B p$ ; personal obstacle) に基づく場合とがある。課題に当面しながら、目標について満足感や喜びのようなポジティブな感情 ( $G+$ ; positive affective state) を持つこともあれば、妨害されたりしてネガティブな感情 ( $G-$ ; negative affective state) をもつこともある。また、目標達成行動を助けるために、誰かが同情したり励ましたりする ( $N u p$ ; nurturant press) こともよくあるとされる。最後に目標がプラスの印で四角の中に示されているが、目標がプラスになるかどうかは、上記した達成動機の3つの基準のいずれかに合致した目標が設定されているかどうかにより決定されるとした。

Kagan, J.ら (1962) の達成動機における縦断的研究の報告によると、達成動機には「達成」と「承認」という2つの動機によって構成されており、この2つの間には非常に高い相関を示している。承認行動とは、他者から自分の才能を認めてもらうことを目標とするものである。たとえば学業に長時間集中するような場合には、強い達成動機と同時に、他者から認めてもらいたいという動機、すなわち、承認の動機を示すことがあるため、両者を分離して考えられないとしている。また、彼らは児童期と青年期・成人期での達成動機を検討した結果、次の4点を指摘している。

①達成行動に関しては、児童期・青年期・成人期を通して安定したものであることが見出された。理由としては、一つには達成というものが、社会的に承認された行動であり、少なくとも社会環境から罰せられるものではないこと。また一つには、達成行動が地位、親からの受容、母親による報酬をもたらし、これらが個人的な満足感につながることを挙げている。そして小学校3年、4年の児童の行動や知能は、その後の高校や大学での知能総力に対する努力を、かなり正確に推定できるとしている。②承認行動についてみると、10～14歳でみられる知的達成が、成人における承認を求める努力と関連していた。それは、中学校において高いレベルやよい学業成績のために努力する子供たちは、成人になっても知的追求を通して、社会的承認を求める傾向のあることを示すからであろう。③知的能力に対する関心は、その後の達成と関連しているが、運動への関心は達成とは関係がないこと。④青年、成人の行動傾向を予測するものとして、6～10歳における行動傾向がとりわけ重要であることとした。

Feld, S.C. (1967) は、達成動機の形成について、①児童期から青年期にかけて、グローバルな達成動機には、適度な安定性がみられた。②母親の態度は、児童期と青年期ではネガティブな関係を示す。つまり児童期では子供が年少であればあるほど、ひとりで何かするこ

とを要求するが、青年期の息子には、独立や達成を勇気づけなくなる傾向がある。③青年期の達成動機と青年の自立性を認める母親の態度には、ポジティブな関係がみられる。④児童期のはじめに一人で何かすることについての母親のネガティブな態度は子供が青年期になった時に示すテスト不安を予測し得るものであることなど、達成動機の形成には、家庭など、青年の身近にいる人々が、大きな影響を及ぼしていることを指摘した。

### 3. 達成動機における性差について

加藤(1979)は、達成動機づけ研究の諸文献を検討する中で、達成動機づけ研究には性差がみられることを明らかにした。しかし、その中で、研究結果に性差が生じていることもあるが、それ以前に手続きの点ですでに差別があることも指摘している。その理由として、加藤は女子を対象とした場合、結果に一貫性がないために処理に困惑したためとしている。この女子の結果に一貫性がないことについて、Alper,T.G.ら(1967)は、男子と比べて女子の結果に一貫性がないのは、①教示の効果に関して、②達成行動の予測的妥当性に関して、の2点に大きな違いがあると指摘している。まず、①教示の効果に関しては、男子の場合達成動機を喚起させる条件下では、中性的、または気楽な条件下よりもn-Achスコア(達成動機得点)を増大させることができる。これに対し、女子にあっては喚起条件が達成的であっても、中性的であってもn-Achスコアに差を生じないことである。また、Field,W.F.(1951)も女子に関しては社会的受容(social acceptance)を高めておくと、n-Achスコアを高めるのに効果があったと報告している。つまり、女子の場合には、達成動機づけが他の人から好かれない、受入れてもらいたいという動機づけと相補的な関係にあるとしている。次に②達成行動の予測的妥当性についてであるが、男子の場合は、達成動機は他の種々の達成行動と関係があるのに対し、女子の場合は必ずしもその様な関係がみられない。つまり、男子のn-Achスコアには達成行動の予測的妥当性がみられるのに対して、女子のそれには見当たらないことが考えられると指摘している。

Horner,M.S.(1968)は、従来いわれる成功への期待、失敗への恐怖に対し、女子は女らしさを失うことに伴って社会的に拒否されることを恐れ、知的達成に対しては男子に比べて成功を回避(avoid success)し、成功への恐怖(fear of success)をもつのではないかと考えた。Horner,M.S.によれば、多くの女子は何かを達成しようとする際には、それが成功した場合に周囲の人から社会的拒絶を受けるのではないかと、また成功するということは、女らしくない行動ではないかということ予想するために、成功に対する不安や恐れをもつことになるといった。つまり、成功することと、女らしくありたいということの間に葛藤が生じるので、達成志向課題においては、成功回避の高い女子は、作業成績を抑えると仮定された。また、Horner,M.S.は、女子の中でも特にどのような特質をもつ者が、より強く成功回避に動機づけられているかという点について、高い達成動機づけをもつ女子の方が、そう

## 青年期における性役割形成と達成動機との関連について

でない女子よりもより強く成功回避に動機づけられているとし、しかも、栄誉を経験したことのあるような有能な女子に顕著にみられると考えた。

以上、性役割、達成動機について概観してきた。しかし、性役割と達成動機との関連についての研究は、まだまだなされておらず研究を行う必要性は高いと考えられる。

そこで本研究は、同研究集録第10号の「青年期における性役割形成と生活感情との関連

表2 達成動機尺度の質問事項

現実努力	1. *何もしないで日が過ぎることが多いですか 2. *あなたはなまけ者ですか 4. 野心がありますか 7. *自分を成功させるよりも、他人の成功を噂する方ですか 11. *試験の準備はあまりしない方ですか 14. 成功を夢みるより、成功に向かって努力するほうですか 17. 仕事を明日に延ばすより、今日のうちに片づけますか 20. 試験にやっと通る以上の勉強をいつもしますか 21. 仕事は一生懸命やりますか 24. *あまり計画しないで、行きあたりばったりにする方ですか
成功願望	3. 自分がしている事を誰かに話す時興奮しますか 5. まわりの人の仕事のやり口を見ると、自分の仕事に影響を受けますか 6. *休日には仕事をすぐ忘れますか 8. *自分が手がけようとする困難な仕事を思ってもリラックスできますか 9. 成功した人の生活を興味深く感じますか 10. しばしば自分のできばえを他人と比較しますか 12. *他人が成功した時うらやみませんか 13. *興奮するような仕事をしていても眠れますか 15. *重要な仕事片付いていなくても、他人の言うことに注意を集中することができますか 16. 成功した人を手本にしたことがありますか 18. *休日にはいつも退屈から解放されますか 19. 非常に成功した人の前で畏敬の年を感じますか 22. 他人の偉大な達成を見て、時として肩身が狭くなりいますか 23. *他人が一生懸命やっても無頓着ですか

\*は逆転項目を示す

について」に続き、青年が人格を形成していく中でその中心的課題となる「性役割形成」と「達成動機」との関連から、青年期の人格形成について検討することを目的に行った。

## 4. 方法

### 4-1. 調査用紙

調査用紙は、フェースシート、性役割尺度達成動機尺度の3部から構成されている。フェースシートには、性別、学年、年齢の記入を求めた。

#### (1) 性役割尺度

性役割尺度は、三川ら(1989)によって作成された『男性統合性』『男性典型性』『女性統合性』『女性典型性』の4因子各10項目計40項目の性役割尺度(表1)を用い、各項目がどの程度自分にあてはまるかを「非常によくあてはまる(5点)」「かなりあてはまる(4点)」「あまりあてはまらない(3点)」「ほとんどあてはまらない(2点)」「全くあてはまらない(1点)」までの5段階で自己記述させた。

#### (2) 達成動機尺度

達成動機尺度は、関(1970)が邦訳したCostello, G.G.の測定法を用いた。関は、それぞれの因子を『仕事をする時、よくする傾向』『成功欲求』と命名しているが、項目の内容から考え併せると、前者を『現実への努力』因子、後者を『成功願望』因子と命名した方がより適切であると考え、新しい因子名で本研究を進めた。質問項目は、表2に示すように『現実への努力』10項目、『成功願望』14項目の2因子計24項目からなり、「非常によくあてはまる(5点)」「かなりあてはまる(4点)」「あまりあてはまらない(3点)」「ほとんどあてはまらない(2点)」「全くあてはまらない(1点)」までの5段階で各項目について自分自身に最もよくあてはまるものを自己記述させた。

表3 被検者及び有効DATA数

	被検者	有効DATA
男子	109	100
女子	129	121
計	238	221

### 4-2. 調査対象

調査は、大阪府下にあるO学院大学大学生を対象に行った。被検者は男子109名、女子129名、合計238名であった(表3)。学部、学科は特定しなかった。また、学年についても1年生から4年生までにわたった。

## 青年期における性役割形成と達成動機との関連について

分析にあたっては、完全回答が得られたものだけに限り有効としたところ、男子100名、女子129名、合計229名の有効データを得た。(表3)。

## 4-3. 調査実施方法

調査は個人配付によって行い、後日回収した。なお、手渡すにあたっては、質問には深く考え込まずに、率直に回答することを強調した。

実施期間は、1990年の6月から7月であった。

表4 性役割尺度の平均とSDおよび性差

尺度	男子(N=100)		女子(N=121)
1. 男性統合性	37.23 (5.80)	>	35.25 (5.34)
2. 男性典型性	31.42 (6.22)	>	29.69 (5.87)
3. 女性統合性	34.07 (6.49)		33.60 (6.07)
4. 女性典型性	35.38 (4.61)		36.26 (4.16)

< : P < .05

表5 性役割尺度の平均とSDおよび性差(1.2年生)

尺度	男子(1.2年)(N=50)		女子(1.2年)(N=60)
1. 男性統合性	36.86 (6.18)		35.10 (5.97)
2. 男性典型性	30.00 (5.16)		29.50 (6.12)
3. 女性統合性	32.62 (5.49)		32.88 (6.78)
4. 女性典型性	35.58 (4.30)		36.13 (4.01)

表6 性役割尺度の平均とSDおよび性差(3.4年生)

尺度	男子(3.4年)(N=50)		女子(3.4年)(N=61)
1. 男性統合性	37.60 (5.37)	>	35.39 (4.64)
2. 男性典型性	32.84 (6.84)	>	29.89 (5.60)
3. 女性統合性	35.52 (7.06)		34.31 (5.18)
4. 女性典型性	35.18 (4.90)		36.38 (4.29)

< : P < .05

大手前女子学園「研究集録」(大手前女子短大研集) 第11号 (1991年)

表7 性役割尺度の平均とSDおよび性差 (三川ら、1989)

尺度	男性(N=91)		女子(N=214)
1. 男性統合性	35.77 (5.49)	>>	33.63 (5.06)
2. 男性典型性	31.36 (5.93)	>>>	29.03 (5.37)
3. 女性統合性	32.05 (6.10)	<	33.79 (5.99)
4. 女性典型性	34.51 (5.13)	<<<	37.01 (4.92)

< : P < .05, << : P < .01, <<< : P < .001

## 5. 結果と考察

### (1) 性役割について

性役割について、男女別に全てのデータを用いて平均値と標準偏差を求め、平均値の差の検定 (t検定) によって性差を検討した結果が表4である。この結果、『男性統合性』『男性典型性』については5%水準で有意に男子の得点が高かった。それに対して『女性統合性』『女性典型性』には有意な差は見られなかった。次に、男女のデータを下級生 (1・2年生) と上級生 (3・4年生) とに分け、それぞれにおいて平均値の差の検定 (t検定) によって性差を検討したのが表5、表6である。

下級生においては、全てにおいて有意差は認められなかった。上級生においては、『男性統合性』『男性典型性』においては5%水準で有意に男子が高かった。これに対し、『女性統合性』『女性典型性』は有意な性差は認められなかった。

これらのことから性役割形成について考えてみると、三川らの研究においては、『男性統合性』『男性典型性』では男子の得点が女子よりも有意に高く、また『女性統合性』『女性典型性』では女子の得点が有意に男子の得点よりも高いというように4尺度すべてに性差は認められた (表7)。しかし本研究において、男性性役割については、同様の結果を得たが、女性性役割については同様の結果にはならなかった。その理由として考えられることは、三川らが行った研究と本研究とを比較してみると、特に女性性役割においては、男子では得点が増し、逆に女子では減少している。この点が、三川らが行った研究結果と異なっている。このことから、男子において女性性役割を獲得している者が以前より多くなってきていると推察できる。しかし、三川らの研究と本研究結果が異なっていたことは、性役割尺度自身に内在する問題点のためとも考えられ、今後さらに研究を進めていきたい。

### (2) 達成動機について

表8は、達成動機について男女別に全てのデータを用いて平均値と標準偏差を求め、平均値の差の検定 (t検定) によって性差を検討した結果である。また、表9、表10は同様に、1・2年生、3・4年生それぞれで性差を検討した結果である。この結果、『現実努

## 青年期における性役割形成と達成動機との関連について

表8 達成動機尺度の平均とSDおよび性差

尺 度	男子(N=100)	女子(N=121)
1. 現実努力	29.68 (5.81)	30.39 (5.23)
2. 成功願望	45.14 (6.47)	46.17 (5.37)

表9 達成動機尺度の平均とSDおよび性差 (1.2年生)

尺 度	男子(1.2年)(N=50)	女子(1.2年)(N=60)
1. 現実努力	29.28 (5.93)	30.77 (5.63)
2. 成功願望	45.80 (6.74)	46.23 (5.48)

表10 達成動機尺度の平均とSDおよび性差 (3.4年生)

尺 度	男子(3.4年)(N=50)	女子(3.4年)(N=61)
1. 現実努力	30.08 (5.65)	30.02 (4.78)
2. 成功願望	44.48 (6.12)	46.11 (5.27)

表11 性役割と達成動機の関係 (男子, N=100)

尺 度	現実努力	成功願望
1. 男性統合性	.2086*	-.0131
2. 男性典型性	.5023**	-.3523**
3. 女性統合性	.4143**	-.2375*
4. 女性典型性	-.1261	.3512**

\* : P &lt; .05, \*\* : P &lt; .01

表12 性役割と達成動機の関係 (女子, N=121)

尺 度	現実努力	成功願望
1. 男性統合性	.4049**	-.1593
2. 男性典型性	.4184**	-.2844**
3. 女性統合性	.4524**	-.1741
4. 女性典型性	-.0110	.3034**

\*\* : P &lt; .01

力』においても『成功願望』においても有意な性差は認められなかった。

しかし、これについては男子と女子では、達成動機が喚起される条件が異なり、その喚起条件が  $n - Ach$  スコア (達成動機得点) に影響を及ぼすであろうという点などから、ここでは性差について言及するには十分でないと思われる。

### (3) 性役割と達成動機との関連について

性役割 4 尺度と達成動機 2 尺度との相関を男女別にピアソンの相関係数によって算出したものが、表11、表12である。

まず男子において、『現実努力』は『男性統合性』との間では、5%水準で、また『男性典型性』『女性統合性』との間では、1%水準で有意な正の相関を示した。『成功願望』においては、『男性典型性』との間では1%水準で、『女性統合性』との間では5%水準でそれぞれ有意な負の相関を示したのに対し、『女性典型性』とは1%水準において有意な正の相関を示した。

女子において『現実努力』では、『男性統合性』『男性典型性』『女性統合性』との間に1%水準で有意な正の相関を示した。また、『成功願望』においても『男性典型性』との間に1%水準で有意な負の相関を示し、『女性典型性』とは、1%水準で有意な正の相関を示した。

これらのことから、男女に共通して考えられることは、まず『現実努力』については、男女とも『男性統合性』『男性典型性』『女性統合性』において、有意な正の相関関係にあるのに対して、『女性典型性』とは有意な相関はみられなかった。つまり、達成動機の『現実努力』の項目においては、「14. 成功を夢みるより成功に向かって努力する方ですか」や「21. 仕事は一生懸命やりますか」など項目の内容が、個人場面での達成動機、すなわち自己実現のための行動に限られており、性役割尺度の項目の中でもポジティブな項目で構成されている『男性統合性』『男性典型性』や『女性統合性』と高い相関を示したと考えられる。

次に、『成功願望』について考えると、男女ともに『男性典型性』とは負の相関にあり、『女性典型性』とは正の相関を示している。このことから考えられることは、『成功願望』の項目をみると「10. しばしば自分のできばえを他人と比較しますか」や「22. 他人の偉大な達成をみて、時として肩身が狭くなりますか」など他者と比較した場合での達成動機、つまり他人と比較して自分を良く見せようとする、いわば自己顕示欲的な要素を含んだ項目で構成されており、その点で「8. 同情的である」や「28. 人に認めてもらいたい」など、どちらかという他人に依存的な項目で構成されている『女性典型性』と正の相関を示したのではないだろうか。

つまり、個人場面での達成行動は、個人の成功達成動機と失敗回避動機からと予測されるが、実際の場面ではそれ以外の外的要因が加わることが多いと思われる。しかしここでは、その外的要因がどの程度影響を及ぼしているのかは、明らかにできなかった。

## 青年期における性役割形成と達成動機との関連について

## 6. まとめ

本研究においては、青年期における性役割形成と達成動機との関連について検討した。性役割については、特に性差について検討したが、『男性統合性』と『男性典型性』には性差は認められたが、『女性統合性』と『女性典型性』には認められなかった。また、上級生（3・4年生）と下級生（1・2年生）のそれぞれにおいて性差を検討したが、上級生の『男性統合性』と『男性典型性』にのみ性差が認められ、三川らが指摘したように4因子すべてにおいて性差を認めるには至らなかった。その理由として、性役割尺度自身に内在する問題、調査を一大学だけで行うのではなく、広範囲に渡ってデータを収集する必要性などが考えられるが、本研究で言及するには十分ではなく、今後、性役割尺度の再検討も含めて研究をさらに進めていきたい。

達成動機については、『現実努力』因子においても『成功願望』因子においても性差は認められなかった。これについては、男子と女子とでは達成動機を喚起する条件が異なっていること、喚起する条件が達成動機得点に影響を及ぼすと考えられることなどが挙げられるが、言及するには至らなかった。

性役割と達成動機との関連については、統合性の次元において、男女とも『男性統合性』および『女性統合性』は、かなり共通する内容をもつが、両者は同一のものではなく、それぞれに異なる側面を併せもっていると考えられ、また典型性の次元において、『男性典型性』と『女性典型性』とは互いに相反する内容をもつと考えられる、という三川らの性役割の構造分析を踏まえて考え併せると、まず、達成動機の『現実努力』因子と性役割との関連については、男女ともに『男性統合性』『男性典型性』『女性統合性』と高い正の相関が認められた。『現実努力』という因子は、現在のありのままの自己を受容し、現実の目標に向かって努力する、すなわち『自己実現』の因子と考えられ、性役割形成において「統合性」を獲得することが、自己実現につながるという構図が浮かび上がってくるのではないだろうか。また、『成功願望』因子と性役割との関連については、『女性典型性』と高い正の相関関係にある。つまり、『成功願望』とは現実の自分を伴わない、目標達成への空想や羨望が強く、不安定な自分と考えられ、依存的な『女性典型性』、伝統的な女性性役割と関連があると推察できる。これらのことから性役割と達成動機の間には、密接な関連があることが示唆されるが、検討される問題点も多数あり、今後の課題として研究を進めていきたい。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、有益なご助言を与えて頂きました、追手門学院大学文学部井上知子教授、ならびに三川俊樹講師に厚くお礼申し上げます。本研究で使用したデータは、沖園雅代さんが調査し収集したものを再分析したものであり、貴重な資料を提供して頂きましたことに厚くお礼申し上げます。

## 大手前女子学園「研究集録」(大手前女子短大研集) 第11号 (1991年)

## [文 献]

- Alper,T.G. & Greenberger,E. 1967 Relationship of picture structure to achievement motivation in college women,*Journal of Personality and Social Psychology*,7,362-371.
- Bem,S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,42,155-162.
- Bem,S.L. 1981 Bem Sex-Role Inventory:Professional Manual. Consulting Psychologists Press Inc.
- Feld,S.C. 1967 Longitudinal study of the origins of achievement strivings. *Journal of Personality and Social Psychology*,7,408-414.
- Field,W.F. 1951 The effects of thematic apperception of certain experimentally aroused needs, Unpublished doctoral dissertation,Univ.of Maryland.
- Horner,M.S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situations,Unpublished doctoral dissertation,Univ.of Michigan.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (I) -研究方法に関する文献展望-追手門学院大学文学部紀要, 23,1-17.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (IV) -性役割尺度再考-追手門学院大学文学部紀要, 24,39-48.
- Kagan,J. & Moss,H.A. 1962 Birth to Maturity. Wiley.
- 加藤千佐子 1979 達成動機づけにおける性差, 宮本美沙子編著, 達成動機の心理学, 金子書房, 第3章, 第3節, Pp76-84.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (II) -自我同一性地位および性役割の測定-追手門学院大学文学部紀要, 23,19-36.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (III) -性役割及び自我同一性地位と価値観の関連-追手門学院大学文学部紀要, 24,23-37.
- 宮本美沙子 1979 達成動機研究の理論的背景, 宮本美沙子編著, 達成動機の心理学, 金子書房, 第1章, Pp3-30.
- McClelland,D.C.,Atkinson,J.W.,Clark,R.A.& Lowell,E.L. 1953 The achievement motive. Appleton-Century-Crofts.
- Murray,H.A. 1938 Explorations in personality. Oxford Univ. Press.
- 沖園雅代 1990 現代青年の性役割同一性確立にかかわる要因について-達成動機と Locus of Controlとの関連から-追手門学院大学文学部心理学科卒業論文.
- 奥野茂夫 1983 達成動機, 小嶋秀夫他編, 児童心理学の進歩Vol.X X II, 金子書房, 第6章, Pp130-150.
- 関 計夫 1970 達成動機の測定法 (1), 関 計夫編, 要求水準の研究, 金子書房, 第5編, 第1章, Pp223-228.
- 芳田茂樹・井上知子 1988 大学生における性役割獲得の様相について, 関西心理学会第100回大会発表論文集, 21.
- 芳田茂樹・井上知子 1989 青年期の性役割形成と生活感情との関連について, 関西心理学会第101回大会発表論文集, 42.
- 芳田茂樹 1989 青年期における性役割形成についての研究, 大手前女子短期大学研究集録, 9, 229-244.
- 芳田茂樹 1990 青年期における性役割形成と生活感情との関連について, 大手前女子短期大学研究集録, 10, 1-19.